

博士学位論文審査要旨

2010年6月24日

論文題目：ヘーゲルにおける共同知の生成

学位申請者：中川 玲子

審査委員：

主査：文学研究科 教授 田端 信廣

副査：文学研究科 教授 長澤 邦彦

副査：文学研究科 教授 林 克樹

要 旨：

本申請論文は、ヘーゲル哲学の方法論の形成期に相当するイェーナ時代の彼の思索の歩みを、「自己形成する人間的知」と「絶対者の自己認識」との相互媒介的な共同によって達成される「共同知」の成立をめざすプロセスと見定めたいうえで、この時代に属する主要論文、およびこの時代のヘーゲルの思索の集大成である『精神現象学』などに詳細な分析を加えている。

第1章～第3章は、その「共同知」の生成の予備的段階として、イェーナ初期の主要な三つの論文（いわゆる「差異論文」、「信と知論文」、「自然法論文」）を題材にして、ヘーゲルがそれぞれ一見対立するように見える「直観」と「反省」、「信」と「知」、「個人の自由」と「共同体」とを「哲学的知」のうちどのように媒介・統合しようとしたかを詳しく考察している。それぞれの章での考察には、それぞれの論文の理解に不可欠な他の哲学者間の論争などの思想史的背景も十分に顧慮され、的確な考察から説得力ある結論を導き出している。

第4章～第6章は、これらの予備的思索がかの「共同知」の生成へと結実していくドキュメントである『精神現象学』のいくつかの章の分析・考察にあてられている。第4章では、「経験の忘却と忘却の経験」という独創的な見解が導き出され、第5章では、「物の没落」と「共同知の生成」の関連が解明され、第6章では、成立しつつある「共同知の未完結性」が指摘される。それぞれの考察は、一部独創的な視点も交えた緻密なテキスト分析に支えられている。

第6章は『大論理学』の始元論を扱い、結論章はかの「共同知」のヴァリエーションともみなせる「共同して哲学すること」の可能性をさまざまな哲学者の立場に即して考察している。

本申請論文は、それぞれの章での結論間の内的連関をより明確にすべきであるという点になお課題を残しているとはいえ、難解なこの時期のヘーゲルのテキストを十分に読み込み、ヤコービ、フィヒテ、シェリングなどの同時代の哲学者たちのテキストも参照しながら、各章で質の高い分析を重ねていること、およびその分析を通してイェーナ時代のヘーゲルの思索に統一的解釈を付与しようとしていることは高く評価できる。

よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2010年6月24日

論文題目：ヘーゲルにおける共同知の生成

学位申請者：中川 玲子

審査委員：

主査：文学研究科 教授 田端 信廣

副査：文学研究科 教授 長澤 邦彦

副査：文学研究科 教授 林 克樹

要 旨：

上記審査員3名は、2010年6月24日、16時30分から約2時間にわたって、徳照館501号室で学位申請者に対して総合審査を行った。専門分野に関する試験は、主査、副査3名による論文内容についての質疑応答という形式で行われたが、申請者はいずれの質問にも的確に应答し、論文主題のみならず関連領域に関しても十分な哲学的知見を有していることが確認できた。

その後行われた語学試験（ドイツ語、英語）でも、申請者は優秀な成績を収め、研究上要求される十分な語学力を有することを確認できた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：ヘーゲルにおける共同知の生成

氏名：中川 玲子

要旨：

ヘーゲルはその主著『精神現象学』（1807年）において、哲学が学として生成する過程を通じて、人間精神がその個性性を喪失することなく、普遍性を獲得することを示そうとした。そもそもヘーゲルにとって精神とは、人間的主体であると同時にそれを超えたものである。すなわち精神とは、現実の諸相において複数の個体によって具体的・主体的に生きられるものであると同時に、そうした諸個体の生を貫通して、自己を展開していく唯一的で普遍的な絶対者である。そして人間的主体にして絶対者であるところの精神が完全に自らを展開した境位こそ、「学」である。それゆえ我々はこの学のうちに、個性性と普遍性の総合を見出すことができるであろうし、またその総合を現実に生きる個々の人間が主体的に引き受ける可能性を見出すこともできるであろう。しかしそうした学における可能性を獲得するために、何よりもまず問題にされねばならないのは、学の生成過程に対する人間的主体の参与の可能性、換言すれば、人間的主体と絶対者が学の生成に共同的に参与する可能性である。精神が人間に生きられるものであり、かつ人間を生かすものであるべきならば、その精神の自己展開である学の生成は、人間的知の自己形成であると同時に、絶対者の自己認識でなければならない。本論文の課題は、ヘーゲルにおける学としての哲学を、その根本において、自己形成する人間的知と絶対者の自己認識との共同すなわち「共同知」とみなした上で、『精神現象学』に先行するイェーナ時代のヘーゲルの主要論文をかかるとともに、その共同知の生成を、その機制としての「自体的にあるいは我々にとって」に注目しつつ解明することにある。

『精神現象学』の「序文」の標題「学的認識について」が示すとおり、ヘーゲルは哲学を「学的認識」にまで高めようとした。その場合の学とは「真なるものがそこにおいて現存するところの真の形態」として、常に真なるものである絶対者との連関をもつ。哲学が絶対者についての知であるような学にまで高まらなければならないのは、学という形態においてのみ絶対者が真に現存することができるからである。しかし哲学が学でなければならない理由はさしあたっては絶対者の側ではなく、哲学の側にある。というのも哲学は、それが人間的知であるかぎり、絶対性をもった知すなわち「絶対知」であることを目指すものであり、そのことは究極的には絶対者との関係において保証されるものだからである。そこで問題となるのは、学としての哲学の絶対性についてである。

ヘーゲルは学の絶対性を、個性性との対比における普遍性、また秘教性に対する公開性として特徴づけている。これらの特徴はいずれも、人間的知が通常は、個人の有する特定の見解に拘束された一面性を脱しえぬ相対的のものでしかないという想定のもとに立っている。学は普遍的であるとともに公開的でなければならない。学としての哲学は、特定の者による秘教的な専有物であってはならず、およそ思惟することのできるすべての者に開かれていなければならない。しかし学がただ単に相対知・個別知と対比されるだけでは、それは個人にとって接近不可能なものになってしまう危険が生じる。そこで懸案となるのが学と非学的な意識との架橋であり、その架橋を可能にするものが精神であり、その根本規定としての思惟である。

ヘーゲルは「学と非学的意識に共通するもの」として「思惟」を挙げる。思惟は、デカルトの場合と同様に、ヘーゲルにおいても精神の根本規定であり、精神は伝統的には実体と呼ばれてきたものである。ヘーゲルが実体を精神と同一視するのは、「実体は主体である」というヘーゲル

特有の実体観に基づいている。ヘーゲルによれば、実体とは現存する諸々の個物の根底に存する永続的で自己同一的な基体である。しかしそれは何か静止したものではなく、自己自身のうちに運動の原理をもつもの、生きたものであり、自ら種々の形態に変化するものである。このような基体性（自己同一性）と運動性（可変性）という対立する契機を媒介し、自らのうちで止揚する「主体」が、ヘーゲルのいう実体である。かかる実体が精神とされるのは、「絶対の他的存在における純粋な自己認識」を通じてのみ実体における対立が調停されるからである。

それではこのような精神に対して、個体はどのような関係を持ちうるのか。個体は精神の一現象にすぎないものであるとはいえ、それ自身実体と同じく一個の主体である。個体が唯一的な精神との同一性を保持するのは、個体が自己認識を通じて普遍性を実現するかぎりにおいて、すなわち学的認識へと上昇するかぎりにおいてのみである。そのかぎりでは、精神の最高の形態である学へと上昇する可能性を有する主体であるといえる。しかしここに一つの困難さが横たわっている。すなわち、個体はそれ自身非学的意識であり、さしあたっては精神の疎外態としてそれ自身精神を欠いたものであるがゆえに、個体は学の生成に参加することが容易にはできないという困難さである。それゆえ個体を何らかの仕方で学の生成過程に導入する仕組み、認識における個体と精神との共同的運動を可能にする仕組みが必要とされるのである。その仕組みとは、「自体的にあるいは我々にとって」と言われる、『精神現象学』の機制である。

精神が他的存在において自己認識するためには、それに先立って他存在へと現象するのだからなければならない。自ら現象するものだけが、その現象において自己を認識することができる。この現象の論理に従って展開されるものが「現象する知」であり、その生成過程にして完成形態が学である。それゆえ学はその本質において「精神の現象学」である。しかし精神の現象は疎外態であり、そこで精神が自己を喪失している状態である。それでは、精神が自己喪失の状態から、いかにして自己を認識するに至るのか。この問いが個体の側から見られると、学の生成への参与の可能性についての問いとなる。この二重にして一つの問いに対するヘーゲルの解決方法はこうである。①精神は常に既に疎外されており、そのようなものとして自体的に存在している。②しかし精神の「自体存在」は同時に、非学的であるにせよ一つの有るがままの意識すなわち「自然的意識」として「意識に対しての存在」でもある。この精神の〈自体的な、他との関係を絶した存在〉と〈意識を通じて他に対して開かれ、他との関係にもたらされる存在〉とは矛盾している。③この矛盾した二つの契機はさしあたっては、それ自身現実に生きる一個体としての哲学者である「我々にとって」存在している。すなわちその反面の対他存在と不可分であるがゆえに矛盾を孕んだ自体存在は、常に可能的な仕方で「我々にとって」存在しているのであり、そこでは矛盾の解消あるいは止揚が要求されているのである。この要求を示す言葉が「自体的にあるいは我々にとって」である。④そしてこの要求に応答することを通じて、言い換えれば、この精神の矛盾が高次の統一に止揚されることを、精神にして個体である「自然的意識」は精神の現象の論理に従って経験し、それと同時にこの意識の経験を「我々」哲学者が同じ論理に従って叙述するという共同を通じて、精神は自己認識に至り、個体は学の生成に参加するという可能性が獲得・実現されることになる。

以上の見通しを立てた上で、本論では、この「自体的にあるいは我々にとって」という機制に依って進行する、学的認識における種々の共同、すなわち、ヘーゲルにおける共同知の生成を解明するために、次のような手順で考察が進められる。

まず共同知の生成の予備的段階として、第1章「超越論的直観と哲学的反省」では、絶対者の認識における直観と反省の共同について、第2章「絶対者への通路としての哲学」では、同じく絶対者の認識における直接知としての信と媒介知としての知との相互補完的關係について、そして第3章「「自然法」論文における「抑制」の概念」では、個体の自由と共同との総合について検討した上で、各々の対立を媒介・統合する哲学的知の契機の不可欠性を考察した。

これら予備的段階の考察に続いて、第4章「意識の経験の忘却」では、『精神現象学』におけ

る「自体的にあるいは我々にとって」という学的認識の機制が、非学的意識において意識の経験の忘却によって隠蔽されながらも、経験の忘却の哲学的自覚を通じて維持されることを、続く第5章「知覚における知の共同性」では、その機制が、経験の遂行を通じて差し当たっては自然的意識の対象の運動として主題化されること、しかしそのために対象意識としての知覚が存立不可能性に陥ることを論じた。そして第6章「不幸な意識」における共同知の未完結性」では、自己意識は共同知として未完結であること、その未完結性はただ絶対者との共同の自覚を通じて克服されることを論じた。

また第7章「『大論理学』における学の始元への問い」では、学の始元において知の共同性は絶対者と不可分である哲学する意志の決意に委ねられることを論じ、最後に、結論として「共同して哲学することの可能性」において、共同知が複数の人間的主体による哲学することの共同として具体的に遂行されることの可能性を考察した。

以上の考察の結果、真なるもの、実体、精神と称される絶対者の現実化としての学的認識の生成が、非学的意識から学へ、精神の自己喪失からその自己認識へと上昇する自然的意識と、その上昇の運動を精神の現象の論理に従って叙述する哲学者との共同を機制としつつ、学的認識における現実に生きる個体と永遠に生きる絶対者との共同として遂行される、重層的な構造から成る共同知の生成であることを解明した。